

# ブリーフィング・メモ

## 再考・寺内正毅の人物像－「ステーツマン」として－

戦史研究センター史料室長 菅野直樹

### はじめに

寺内正毅（1852(嘉永5)年生～1919(大正8)年没）と聞いて、何を思い出すだろうか。例えば寺内内閣（1916(大正5)年10月～1918年9月）発足時、時代錯誤の藩閥内閣として「非立憲（ピリケン）」と揶揄された。寺内の私設秘書とも称すべき西原亀三を利用し、中国北方の段祺瑞政権に1億数千万円にもものぼる資金を提供した（西原借款）。最後の年に米騒動が起り、シベリア出兵を開始した。寺内は、陸軍長州閥の総帥・山県有朋の亜流とも称された。

対して、後継の原敬内閣（1918年9月～1921年11月）はどうであろうか。ちょうど現在から100年前、陸軍、海軍、外務の3大臣を除けば閣僚が総て政党员からなる内閣がスタートしていた。第一次世界大戦後に、世界的な外交の潮流が大きく変容する中で、日本でも本格的な政党政治が展開していた。

寺内は原に比較し、どうも分が悪い。1915年の対華21箇条要求以来、日中関係が悪化していた中で、挽回を期して実施された前述の西原借款も、これはこれで中国の北方のみ、しかも一時期に限って存在した段政権に肩入れし過ぎてしまい、結局は関係改善に繋がらなかった。そうしたこともあり、最近まで寺内の人物像については、学界でもほぼ顧みられなくなっていたといえる。

しかし、かつて昭和陸軍閥の源流とされた山県が検討し直されている中で（伊藤隆編『山県有朋と近代日本』吉川弘文館、2008年）、寺内についても再検討の余地はないのであろうか。以下、寺内について考察してみたい。

### 寺内正毅の一面

戊辰戦争時、長州藩の部隊（整武隊）に属し、現在の青森県及び北海道にまで転戦した寺内は、東京に凱旋後の1869（明治2）年、兵部省の命を受け、京都でフランス式歩兵学を学んだ。部隊で仕えていた山田顕義の勧めにより、寺内は帰郷を思いとどまり、軍人への道を志したのであった。これは当時17歳の寺内にとり大きな選択であったろう。

1877年の西南戦争に際し、寺内（当時、陸軍大尉）は、右腕を負傷し大阪臨時病院で治療を受けた。施術に当たった後年の軍医総監・石黒忠憲（ただのり）によれば、同じ右上腕部を負傷した将校が先にもう一人居り、手術して完全に腕を切断した。一方、寺内については、「治療上試験のため」碎骨をことごとく取り出して腕はそのままとし、副木を当てて繃帯した。寺内の腕は、その後骨膜から硬質を生じ、数年後には皮革でつくった装置を付して剣を持てるようになったという。しかし、寺内は終生、筆記に多大な困難を来したのであった。後述するように、この一見個人的なことにも思える事象が、研究史上の無視できない問題に繋がることになる。

1882年、30歳であった寺内（当時、陸軍少佐）は、フランスに留学する閑院宮載仁親王の補佐役として随行し、初めて海外へ渡航した。滞仏中の寺内は語学に、そして普仏戦争をはじめ戦史の研究に打

ち込んだ。1884年に陸軍卿大山巖をはじめ、三浦梧楼、野津道貫、川上操六、桂太郎等15名にのぼる一行が、師団制への移行をにらみヨーロッパ各国へ軍制視察に赴いた際、寺内がフランスにおいて先導の役割を担ったことは、以降の経歴にも少なからぬ意義を有したであろう。寺内のフランス滞在は3年弱に及んだ。

日清戦争に際し運輸通信長官を務めた寺内（当時、陸軍少将）は、戦後の1896年から、フランス、ロシア、オーストリア、ドイツ等各国陸軍の状況を1年がかりで視察した。寺内は、フランスで露仏関係の一端を垣間見、ロシアでは皇帝ニコライ二世に謁見し、近衛部隊の編制・設備・訓練方法に注目した。ドイツで寺内は陸軍省に勤務する軍人から、陸軍の予算及び編制について詳細に聞くことができた。こうした豊富な海外経験と、日露戦争時に陸軍大臣を務めた行政手腕は、寺内を考察するに当たって欠かせない側面であろう。

### 寺内と周囲の人びと

冒頭に述べたように、とかく寺内と原敬（1856(安政3)～1921(大正10)年）は対照的に見られがちであるけれども、明治期に同じ内閣でともに閣僚を務めた経験があり、比較的良好な間柄であった。1912（大正元）年に第2次西園寺内閣が倒れる原因となった二個師団増設問題は、陸相上原勇作の増設への意気込みから閣内不一致となり、上原の単独上奏に及び、倒閣に至ったが、原は寺内について、上原のような立ち回りをしない人物と評価し、一定の信頼をおいていた（『原敬日記』1913年10月16日）。寺内内閣期に原は立憲政友会を率い、「是々非々」の立場で寺内を支えた。

西原亀三（1873(明治6)～1954(昭和29)年）は、寺内に私淑していた人物である。寺内の朝鮮総督在任時から、西原は朝鮮半島における産業や経済の在り方について幾度となく見解を披瀝し、寺内から更なる意見を求められた。対華21箇条要求に代表される第2次大隈内閣の中国政策に対し、西原は寺内とともに慨嘆したのであった。そうした西原が寺内内閣の発足後、首相寺内の意を受け、日中関係改善のため奔走したことは当然の経緯だったのかもしれない。しかし、寺内の姿勢は、北方の中国統一を視野に入れ、北方のみに肩入れを深めようとした西原とは異なっていた。西原は、自身と寺内の間にあった相違に無自覚でありつつ、寺内への傾倒と、日中関係改善に向ける熱い思いから、夥しい数の自筆史料を遺していた。

九州実業界の雄であった安川敬一郎（1849(嘉永2)～1934(昭和9)年）と、寺内の関係も興味深い。1915年末以降、中国が事実上南北に分裂していた中で、九州製鋼の経営者であった安川は、南方に拠点を置いた孫文と近い関係にあり、南北双方の自発性を尊重しつつ調停がなされるべきと考えていた。こうした穏健な姿勢は、中国に対する寺内の姿勢と非常に類似していたのであった。第一次世界大戦中にアメリカが鉄鋼輸出を禁じた後、安川は中国の鉄資源について、しばしばその重要性を寺内に訴えていた。

意外なようであるが、西原と並んで、寺内に私淑していたもう一人の人物として、吉田茂（1878(明治11)～1967(昭和42)年）を挙げねばならない。吉田が満洲で外交官生活を始めた少し後から、寺内との間には交流があった。寺内の朝鮮総督在任時である1912年から1916年までの間には、吉田は安東（現在、中国遼寧省丹東市）領事の職務に加え、朝鮮総督府書記官も併任していた。殊に寺内の首相就任時には、吉田は秘書官を務めるよう説得され、辞退している。この頃、30歳代であった吉田は晩年、後進に対し助言と督励を惜しまなかった寺内を追懐している。

最後に、これまで寺内及び寺内内閣を検討する上で、大いに参考にされてきた西原借款の研究について若干触れ、今後の寺内研究の一助としたい。

### 西原借款研究がさかんであった時代

国立国会図書館東京本館憲政資料室に所蔵されている「西原亀三関係文書」をはじめ、豊富な西原自筆史料に依拠し、1960年代、東京大学大学院経済学研究科において研究会が発足した。西原借款の研究は、1980年代までさかんであった。右腕に障害があり、自筆の史料をあまり遺せなかった寺内とは対照的に、多くの史料を遺した西原の見解から、寺内内閣と西原借款に関する歴史学的議論が始まった。

研究会の指導的役割を担った人物は、法政大学総長・大内兵衛であった。大内はかつて東京帝国大学を卒業後、大蔵省に勤務した。寺内内閣期に、大内は大蔵大臣勝田主計と並んで庁舎を出入りする西原の姿をみていた。研究会における寺内・勝田・西原の連携を重視した議論は、こうした大内にとつての西原のイメージとも無関係ではないであろう。

日本は1960年代、佐藤内閣期にあって、まさに高度成長期を迎えていた。経済的には中国に対し、日本は圧倒的優位にあった訳だが、こうした両国の関係は、第一次世界大戦期に未曾有の黒字国となり、段政権に向き合っていた寺内内閣期の構図と似ている面があった。西原借款研究の成果が相次いで刊行された時期には、米中接近、中国の国連加盟、そして日中国交正常化が続いた。

中国の本格的な国際社会への登場の一方で、日本の世論が日中戦争へと繋がっていった過去の轍を踏まない関係の在り方を希求する中で、学界においては西原借款研究の副産物として、寺内に関する負のイメージが広められていったことは否めない。

西原借款研究がさかんであった上述の時代も、すでに歴史学の検討対象となっている今日、西原の遺した史料が寺内研究のために依然重要であることを認めつつ、寺内にとつての西原の存在を相対化し、寺内の実態に迫るべきではないだろうか。

### むすびに代えて

以上に述べたとおり、寺内像に再検討の余地がある、と思われる。これまで寺内について、西原を介し考察してきたことが多かったが、これからは寺内と、西原以外の人びととの関係という視点を交え、寺内像を再構成していくことが課題なのである。

本文で、寺内の文民政治家、実業家、外交官等との接点をとりあげたが、より広汎な人脈については下掲の学術書等に譲る。ともあれ、寺内には軍人というより、いわば「ステーツマン」としての一面があった。古い言葉であるが寺内の「秉公持平（へいこうじへい、公平公正といった意味）」というモットーも、寺内が陸軍以外の各界要人に真摯に向き合っていたことから、あながち誇張ではなかったといえる。

寺内と原の対照、寺内と西原の二人三脚、という構図は、今まであまりに当然視されてきた観がある。こうした二重のヴェールから脱したとき、寺内の実態が従来よりも鮮明になるように思われる。そしてこうした取り組みは、文民政治家と軍人を対の関係のように捉えがちな思考の是正にも有益なのかもしれない。

**参考文献（既掲の文献等を除く）**

- 林茂・辻清明編『日本内閣史録』2、第一法規、1981年。  
黒田甲子郎『元帥寺内伯爵伝』非売品、1920年。  
伊藤幸司・永島広紀・日比野利信編『寺内正毅と帝国日本』勉誠出版、2015年。  
石黒忠憲『懐旧九十年』岩波書店（岩波文庫）、1983年。  
斎藤聖二『日清戦争の軍事戦略』芙蓉書房出版、2003年。  
拙稿「寺内正毅像の再検討に向けて」、『史学雑誌』第127編第10号、2018年10月。  
猪木正道『評伝吉田茂』（上）、読売新聞社、1978年。  
鈴木武雄監修『西原借款資料研究』東京大学出版会、1972年。  
北村敬直編『夢の七十余年』平凡社（東洋文庫）、1965年。  
大内兵衛『大内兵衛著作集』第三巻、岩波書店、1975年。  
井上正也『日中国交正常化の政治史』名古屋大学出版会、2010年。